

脱ディベートのすすめ

——研究協議会のまとめ——

余 郷 裕 次

ディベートが、国語科に限らず社会科や道徳の授業においても有効な討論の方法として注目を集めているのは周知の事実である。国語科におけるディベート導入の有効性や問題点に関する実践・研究報告も多く、ディベートが雑誌の特集の主題としても扱われるようになってきている。また、中学校国語教科書のすべてがディベートに関する教材を採録している。こうした状況の中で、ディベートではなく、「討論」を研究協議のテーマとしているところに本学会のスタンスが感じられる。

さて、競技としてのディベートとは、野球や将棋が一つの完結した世界を持った文化であると同様に、それ自体が、特殊な完結した文化形態であり、非常に高度な能力・技術を要するものである。したがって、ディベートの場面において要求される言語能力は、「討論」などの話し合い活動において要求される言語能力とは異なるものとなる。

一方、競技としてのディベートも含めて、一般にディベートと言われるものは、相互交代性、即時応答性が要求され

る話し合いの一形態とすることができ。ディベートを場面ごとに分解すれば、それぞれの場面で、学習者が「話す力」、「聞く力」を獲得する機会はあると考える。

しかし、先述のように、ディベートにおける討論は非常に特殊なものと言わざるをえず、特殊で非日常的なディベートの討論力を中・高校生に身につけさせることには疑問が残る。（発言に対して消極的な学習者にも、立論・尋問・反駁等の発言の機会が与えられる等、ディベートに多くの利点があることは認識している。）

こうしたディベートへの批判に対して、吉田和志氏は、「パネル・ディベート」を提案された。これは、ディベートの問題点を、パネルディスカッションの価値の多様性等の特徴を取り入れて克服しようとした「ディベートの応用・発展型」（吉田）というものであった。

吉田和志氏の提案を敷衍すれば、まずディベートありきで、「話し合う力」の育成を考えるのではなく、中学校・高等学校において育成すべき「話し合う力」を考え、その

ために対話を基本とする様々な話し合い活動を授業の中で組織し、必要な「話し合う力」の育成を図るべきということになるのか。その様々の話し合いの形態の一つとしてディベートもあるというのが健全な姿ではないかと考える。

大里康暁氏は、「ふだんの授業の中で、「話し合う」という活動をなかなか活用できない。お互いの考えを連鎖的に発展させながら、自分自身のものの見方を鍛えていく。そのような授業を作りたいと思いつながら、いざ「話し合う」場面では思うように意見が交わせない。一つには、生徒が本当に話し合うに足るような素材を、日々の授業の中で与えられていないということがあると思う。」と述べられた。話し合うべき素材が学習者の内面に生成されれば、話し合う場面が自然に生まれるということもあるだろう。授業で「討論」を活用しようとすれば、「討論」せずにはいられないものとして素材（テーマ）を学習者の内面に育てる長いスパンの準備が必要であらう。

檀原理恵子氏は、「集団思考にとって話し合い活動は欠かせないものである。洗練された討議行為の過程が思考体制そのものであるといっても過言ではない。国語科授業にとってもそれは同様で、討議・討論の力の育成や活用は緊要の課題である。」と述べられた。国会の討議行為にその国の民主主義のレベルが象徴的に現れるように、話し合いによる集団思考能力・集団意思決定能力の育成が、民主主義の維持・発展の基盤になるのは言うまでもない。国語科

授業において、何のために、何を指して「討論」を活用していくのか。流行に目を奪われてその不易の面を見失ってはならない。

今回の研究協議では、「討論」Ⅱディベートという提案は無かった。教育現場で、「討論」を活用した「話し合いの力」の育成が真摯に求められ、実践が積み重ねられていることが確かめられた。また、ディベートを研究する立場からも批判に答える新たな提案がなされたことも意義深いと考える。

最後に、貴重な提案をいただいた三人の先生方と、司会の不手際にも関わらず、長時間にわたり終始真剣に討議にご参加くださったフロアの先生方、ならびに、要所要所でご助言をいただいた大槻和夫先生に感謝申し上げます。

（鳴門教育大学）